

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第55号 2019年7月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP(最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム	シティズンシップ教育の高大連携に向けて	猪股 大輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(55)	カナダメソジストの東洋英和女学校	神辺 靖光	8
山口高等商業学校『生徒生計調査書』(1935年)を手にして — 山口高商生の実態に触れる —		谷本 宗生	12
明治後期に興った女子の専門学校(10)	下田歌子の英国留学	長本 裕子	15
カレッジノベルの研究への道(7)	:日本の研究に見るカレッジノベル(3)	吉野 剛弘	20
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(20)	— 金沢大学資料館 —	田中 智子	24
木下広次をめぐる史料(2)	— 「国の維持力(1899年躬行会例会)」(2) —	富岡 勝	30
体験的文献紹介(3)	— 漢文学習のテキスト —	神辺 靖光	33
第1回「ニューズレター・コロキウム」(2019年6月2日) の記録(梗概)		加藤 雄大	37
コラム	ニューズレター・コロキウムで私が得た収穫	神辺 靖光	41
【ご案内】旧制松本高校創立100周年!	今年のテーマは「寮」旧制高等学校記念館 「第24回夏期教育セミナー」8月17日・18日	金澤 冬樹	44
短評・文献紹介			47
会員消息			51

コラム
シティズンシップ教育の
高大連携に向けて

いのまた だいき
猪股 大輝
(東京大学大学院)

1. はじめに

来る7月21日は、第25回参議院議員通常選挙の投票日である。今回の参院選は、2016年6月、改正公職選挙法が施行され、選挙権年齢が18歳に引き下げられて以来、3度目の国政選挙である。

選挙権年齢の引き下げ以来、選挙が行われるたびに、改正によって新たに選挙権を得た18歳、19歳の投票率が注目を浴びてきた。引き下げ後、最初の国政選挙となった第24回参議院議員通常選挙(2016)年では、18～19歳の投票率が45.45%となり、20代の投票率を上回った。翌年行われた第48回衆議院議員総選挙でも、18～19歳の投票率は41.51%で、同じく20代の投票率を上回る傾向が持続した。以上2選挙の若年層投票率を表にまとめると、以下のようになる。

世代	投票率(%)	
	第 24 回参院選	第 48 回衆院選
18	51.17	50.74
19	39.66	32.34
20	34.75	29.49
21	32.68	29.19
22	30.78	30.82
23	32.86	31.86
24	34.86	32.37
18～19	45.45	41.51
20～24	33.21	30.69
全体	54.7	53.68

表1:選挙権年齢引き下げ後の国政選挙投票率の比較¹

表を分析してみると、一概に「新たに選挙権年齢を与えられた若年層投票率が高い傾向にあった」と楽観的な評価のみを加えられるわけではないこと

がわかる。たとえば、表からは、①18歳投票率と19歳投票率に著しい格差があること、②20代前半にかけて、投票率が著しく低下していること、特に20歳～22歳の大学生世代にこの傾向が顕著であること、③2016年の第24回参院選で投票行動を行ったはずの18歳世代の相当数が、2017年の第48回衆院選で投票を行っていないこと、などを読み取ることができる。

以上の傾向は次のことを示す。すなわち、高等学校を卒業した人の多くが、高等学校在学時、あるいは卒業直後には投票していたにも関わらず、その後しばらく投票にいかなくなる、という事実である。特に、高等教育機関(大学・短大・専門学校・高専4年次)への進学率が80.6%(2017年)に達している今日において、高等学校から高等教育機関へ移ると共に、学生の「選挙離れ」が起こっている、と言えるのではないだろうか。それでは、この問題に対して、教育にはなにができるのか、このことについて本論では考えてみたい。

2. 投票行動論から見る低調な若年層投票率の原因

そもそも、なぜ、このような事態が起こっているのか。原因を考えるために、投票行動分析における、古典的な研究を引いてみる。1968年、ライカーとオードシュックは、投票によって個人が得る複数の利益の和が、投票コストよりも大きいときに行為者は投票する、として、次のようなモデル式を立てた。

(式): $R = PB - C + D$

R: 有権者個人が投票によって得られる効用

P: 自分の一票が結果を左右する確率($0 \leq p \leq 1$)

B: 有権者が最も好む候補者が当選した時に得られる確率と最も好まない候補者が当選した時に得られる利得の差異

C: 有権者が投票することによって生じるコスト

D: 投票義務感・選挙を通じて民主主義システムが維持されることから得られる長期的効用²

このモデルにおいて、Rが正の値を取れば、有権者は投票に向かい、負の値を取れば、投票に向かわない。このモデルに従えば、現在の若年層の低投票率状況は、Cが他世代と比べて大きい、あるいはPB、Dの総和が他世代と比べて小さい、のいずれか、または両方の原因を考えることができる。

まずは、前者、すなわちCが他世代と比べて大きい、という可能性を考えてみる。この点に関して、しばしば聞かれる問題は、住民票と投票権との関係である。現在の選挙制度では、選挙権は原則、住民票のある市町村において付与される。しかし、進学等の関係で実家を離れた学生の実に63.3%（2015年）が住民票を、下宿先の市町村に移していない³。この結果、下宿学生の多くにとって、投票のためには不在者投票制度を利用するなど、通常の投票行動に加えて、新たなコストを強いられている。以上の課題は、高校卒業後の若年層の「選挙離れ」の大きな一因であると考えられる。

次に、後者、すなわち、PB、Dの総和が他世代と比べて小さい可能性を検討してみる。まず、PとBについてであるが、この点を世代間の問題として捉えることは難しいように思われる。なぜなら、PもBも、諸個人の持つ様々な属性に左右されるもので、世代問題のみに帰着させることは正当でないからである。以上の事由から、P・Bについてはここでは取り扱わない。

最後にDについて。Dの値と投票率に強い相関関係があることは一般に知られている。ところで、政治学者の荒井紀一郎の、両者の関係に関する、次のような指摘は、本論の考察に資するものがあるように思われる。

義務感と参加との間に確認される強い相関関係は、義務感が参加を促進させるからというより、市民が政治活動に参加し続けることによって、徐々にその活動に参加しなくてはならないと認識するようになるからと考えた方が、より自然といえよう⁴。

荒井は、このような指摘を踏まえつつ、政治参加の理論として新たに「強化

学習」モデルを打ち出している。そのモデルとは、「市民の若い時期（選挙権を得た最初の選挙）での投票経験と支持政党の連勝が、その後の参加に大きな影響を与えている」⁵ことを実証するモデルである。以上の指摘、およびモデルからは、Dに関連した、世代間の差異を考察することができる。すなわち、やや単純化して言えば、「学習」以前の若年層はDの値が低く、逆に、繰り返しの選挙により「学習」を蓄積した高齢者層はDの値が高くなる、そのために投票率の格差が生まれている、と考えられる。

しかし、この説明では、本論冒頭で指摘したもう一つの問題—すなわち、18歳世代とそれ以外の若年層世代の投票率の差異を説明しきれない。Cに関する18歳とそれ以外の世代の差異については先述したが、例えばDに関して、それ以外の要因を考えることはできないだろうか。この要因の1つとして、本論では「教育」—特に中等教育と高等教育の性格の差異—に着目したい。

中等教育と高等教育には、いくつもの大きな差異を認めることができるが、ここでは、生徒/学生の属する学校コミュニティの差異に着目して投票率と「教育」の関係についてみていく。まずコミュニティの差異について。一般に、中等教育までのコミュニティは、ホームルームを母体としつつ、数百人程度の同学年と、長時間、共に学校生活を過ごす中で形成される高密度なコミュニティである。一方、高等教育のそれは、講義やゼミ、サークルなど、それぞれの場面において、一時的に形成される、一過性のコミュニティである、と言える。この差異は、投票率にも大きな影響を及ぼすと考えられないだろうか。すなわち、高密度な中等教育までのコミュニティでは、教師あるいは周囲の生徒により、投票義務感が一時的に喚発される。一方、一過性のコミュニティでは、このような喚発は期待できない。また、高校までの一時的喚発も、「政治活動に参加し続け」たことによる「学習」の成果ではないから、高等教育において継続しにくい。それゆえに、18歳世代と、それ以外の世代の投票率格差が生まれる、と考えることはできないだろうか。

3. 教育には何ができるだろうか

さて、まとめつつ、結論に移りたい。本論がこれまで指摘してきた通り、若年層投票率の低下が深刻であり、その原因には、投票コストの増大、あるいは投票義務感が、「学習」の不足により低い値をとっていること等が考えられる。では、この問題に対してどのような対処が求められるだろうか。前者—すなわち投票コストの問題—については、インターネット投票制度の確立など、環境の整備が求められるだろう。一方、後者について、解決の糸口を見出すことはなかなか困難である。ただ、本論では、再び「教育」に着目し、この点を考えることで結論に代えたい。

上記ですでに指摘したように、18歳とそれ以外の若年層の間の投票率の差異の原因の一端は、教育、及び教育環境の差異として説明できる可能性がある。では、この差異を埋めうるような「教育」とはどのようなものであろうか。

このような「教育」として、即座に浮かぶのは、選挙権年齢の引き下げに合わせて、その必要性が繰り返し唱えられるようになった主権者教育(シティズンシップ教育)である。高等学校では、次期学習指導要領において教科「公共」が必修化されるなど、すでに大きな変化を生んでいる。しかし、こうした風潮は、高等教育機関までは、なかなか及んでいない。無論、主権者教育は、単なる「投票率向上」のみを目指すものではないが、まずは「投票行動」という最も手軽な政治参加を重視し、参加を通じた学習⁶のスパイラルへ、被教育者を向けていくことは、その教育活動の一端に含まれているだろう。そして、このような教育は、「平和で民主的な国家の形成者」の育成を目的とする高等教育機関にもまた、求められているのである。

近年、高等教育機関におけるシティズンシップ教育の試みとして、「シティズンシップ教育の高大連携」が唱えられるようになってきた。その実践は、単に、大学の教員が、高校の教員と協力して、「学問」の面白さを高校生に紹介するような、一方的な取り組みに留まるものだけではない。大学生と高校生が協同し、実際の政治問題について、ディスカッションを行うなかで、双方で学

び合うプログラムもまた、構想されつつある。こうした取り組みは、上述したような中等教育/高等教育の差異を乗り越える実践として注目に値するだろう。この取り組みに対して、さらに求められるのは、それが、一過性のコミュニティづくり(授業づくり)に留まるのではなく、生徒/学生の区分を超えて、「若者世代」として積極的に、広義の「政治活動」(投票行動やボランティア活動などを含む)に取り組んでいけるような、恒常的なコミュニティ形成の始点となることである。そのためにも、こうした取り組みを始点とした、カリキュラム全体を構想し直していくことが求められるのである。

投票率の問題は、本論全体で考えてきた通り、単に「教育」だけの問題ではない。しかし、もし「教育」にもできることがあるのであれば、それを可能な限り思考/志向していくこともまた、求められているように思う。その可能性として、本論に記したこともまた参考になるかもしれない。

〈注〉

¹ 表の作成については、以下2資料を参考にした。

総務省(2016),「第24回参議院議員通常選挙における年齢別投票状況」

総務省(2017),「第48回衆議院議員総選挙における年齢別投票状況」

² ・Riker, William and Ordeshook, Peter.,(1968),A theory of the calculus of voting, *American Political Science Review*,62:28-42.

・荒井紀一郎(2014),『参加のメカニズム:民主主義に適応する市民の動態』,木鐸社

³ 明るい選挙推進協会(2015),「18歳選挙権認知度調査」

⁴ 荒井(2014),前掲書,55頁

⁵ 荒井(2014),前掲書,141頁

⁶ ここでいう「学習」は、荒井のいう「自己の過去の選択とその帰結から次回の自分の行動を決定する」という「人間の行動理論のひとつ」(同上,58頁)を指すのではなく、教育学的な意味で使われる「学習」を指す。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。**

逸話と世評で綴る女子教育史(55)

カナダメソジストの東洋英和女学校

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

明治のはじめのキリスト教女学校はアメリカプロテスタント改革派のフェリス女学校、長老教会の女子学院、メソジストの海岸女学校、聖公会の立教女学校、ボードミッションの神戸英和女学校、同志社女学校等に焦点をあてたが、明治後期は明治20年前後に活動したカナダメソジストの女学校開設から述べてゆきたい。

メソジストは18世紀に英国でおこった敬虔主義的な信仰復興運動で北米大陸に波及し、1828年、カナダメソジストが組織された。1873年、カナダメソジスト教会は外国伝道を決め、マクドナルド D.Macdonald とカクラン G.Cockran を日本に派遣した。カクランは同年即ち明治6年、中村正直に招かれて同人社で教えた。マクドナルドは静岡教会を創立した。明治14年＝



校長カートメル

1881年、カナダハミルトンのセンテナリー教会の婦人達が婦人伝道会社 Woman's Missionary Society of the Methodist Church Canada を創立し、その事業の第一歩として日本伝道を決め、実行者としてカートメル M.J.Cartmell を指名した。カートメルは明治15年来日、しばらく東京の築地で日本語の勉強と伝道に

従事していたが、女学校をたてようと思い、16年、伝道会社に書を送り、これを提案した。ところが、伝道会社でも同じ頃、日本に女学校をたてることを企画し、その書簡がカートメルに発せられたので両書簡が太平洋上で交叉した。

この年、在日カナダミッシヨンは東京の麻布に土地を見つけ、カートメルにこの土地を買うことをすすめた。カートメルは本部の賛同を得て1,000ドルでこれを買った。当時、外国人は土地を所有することができなかつたのでカクラン門下の小林光泰以下4人の日本人を名儀にして東洋英和学校と東洋英和女学校を設立することにした。因みに東洋英和学校は現麻布中学高等学校につながる男子の中学校である。

東洋英和女学校の設置願は明治17年9月22日付で東京府に提出された(東京都公文書館蔵)。学校所在地は麻布区東鳥居坂町14番地、設置願提出者は東洋英和学校会社長・小林光泰、教頭は当年38歳のM.ジュリア・カートメルとなっている。だが、学校長履歴のところにカートメルの履歴が書かれているから彼女が学校長であった。カートメルはカナダのトロント公立女子師範学校を卒業して17年間、ハミルトンの女子師範学校の教員・校長を勤めた。算術と普通学、文学とフランス語及び音楽が教えられるという。



創立者 小林光泰

生徒定員は通学生は110名、寄宿生60名、計170名、授業料は月1円、寄宿料は月食費2円70銭、炭油浴場費30銭、器械料50銭、オルガン授業料1円で認可された。

年齢10歳以上、小学中等科卒業を入学条件にする学科課程は修業年限のきまりがないが学科は次のように盛りだくさんである。

修身 読書 作文 習字 算術 地球 本邦歴史 図画
博物 物理 裁縫 唱歌 体操

明治初期の単純素朴な英学塾ふうでもなく、西洋日本の学科を案配し、女子教育のための裁縫、唱歌なども組み込まれている。時あたかも「小学校教則綱領」「中学校教則大綱」が公布された直後であり、官立女子師範学校が予科を廃して附属高等女学校を創設したばかりの時であったので女学校のカリキュラムについて教育関係者の関心が高まっていた。東洋英和女学校の設置者である小林光泰は長野県師範学校を卒業して数年、県の小学校で教え、東京築地でカナダメソジストのイビー C.S.Eby について宣教師になった人物である。学校教育の現場についてくわしい。東洋英和女学校の最初の学科課程は小林光泰の考えが入っていたと思われる。

明治17年10月頃から数人の生徒で授業をはじめたが教師はカートメル一人であった。しかし翌18年早々、露木精一とモード・カックランが加わった。露木精一は明治3年から静岡藩英学校でアメリカ人クラーク E.W.Clark に就き、次いで静岡県英学校でカナダメソジストの宣教師マクドナルドに就き、さらに東京築地でカートメルに就いて英学を学んだ人である。モード・カックランは前に述べたカナダメソジスト派遣の宣教師カックランの次女で当年17歳であった。こうして英学はメソジスト派でかため、日本人教師として水野峯子、酒井ますの二人を雇った。

生徒は開校直後の17年12月頃は50名前後であったが18年1月には入学者が日々に増加し170名ぐらいになった。この時期はいわゆる鹿鳴館時代の幕開けで、日本に西洋上流社会風俗が流れ込んだ。東京はその絵舞台であり東洋英和女学校の麻布の地は旧武家屋敷地から新官僚の住宅地に変貌したつつあった。この女学校に生徒が集ったのは、このような時代の風潮に乗ったからでもある。

18年2月、カナダメソジストから派遣されたミス・スペンサー E.S.Spencer が来日、カートメル校長をよく助けた。同年3月には元尾張藩士の都築直が教員になって漢学や習字を担当、やがて教頭になって、この女学校の日本文化面の中心教員になる。この頃になると創立者カートメルは健康を害して、しばしば静養する身となった。来日以来の築地での日本語勉強や布教活動と麻布での校舎建築に毎日、築地から人力車を駆っての監督、開校に向けての準備に疲労困憊したのであろう。秋にはミス・スペンサーに校長職を譲って20年4月、帰国した。前年の19年6月、未定であった学科課程の修業年限を予科3年、本科5年と定めて本科を高等女学校並にした。生徒は250名に達した。当時の生徒の回想によれば岩倉、伊藤、陸奥、仁礼、山尾等の新貴族や実業家の娘、地方から上京した生徒も多くは富裕な家庭の娘であったという(卒業生・野村みち子の回想)。こうして東洋英和女学校は鹿鳴館時代の波に乗って順風満帆の船出をしたのである。

参考文献『東洋英和女学校五十年史』

『都史紀要9・東京の女子教育』

山口高等商業学校『生徒生計調査書』(1935年)

を手にして 一山口高商生の実態に触れる一

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

今回、古書店(東京都文京区西片:杉原書店)から、山口高等商業学校東亜経済研究所による発刊の『生徒生計調査書』(1935年度)を入手することができたので、本稿で少し紹介してみたいと思う。

山口高等商業学校生を対象とする『生徒生計調査書』は、1932年度から当初は山口高等商業学校調査課(後に組織改編され、東亜経済研究所となる)で発刊され始めたものである。たとえば、1935年度の調査では、当日学校出席者745名に対し提出率99%の737名が、調査票に回答し提出している。山口高等商業学校教授(東亜経済研究所調査部長)の石津漣(1918年山口高商卒、1924年東京商科大卒)が担当となって、その生徒らの生計調査データを纏めている。

この『生徒生計調査書』では、出身学校、住居調(実家の所在地、居住先)、職業調(実家の職業)、家族調(家族構成)、学資支給調、支出額調、寄宿舎生調、卒業後の方針調、趣味・娯楽調、嗜好調、運動調、読書・新聞雑誌調といった内容が示されている。なお同じく、毎年刊行されている『山口高等商業学校一覽』にも、「統計」として次のような生徒らのデータが挙げられている。本籍地、家庭の職業、年齢、身体検査、学資、入学者出身学校、卒業生職業、卒業生分布などである。たとえば1935年度であれば、入学者出身学校

(中学校卒185人、商業学校卒49人、専門学校卒1人)、本籍地(計775人のうち山口292人、広島108人、福岡80人)、家庭の職業(計775人のうち商業248人、農業183人、無職92人、会社員88人、官公吏66人)、卒業生職業(計3268人のうち商店会社1753人、金融435人、商業369人、無職354人、自営318人、工業270人、教員262人、官吏232人)などが、基本的な山口高商生らのデータといえるだろう。

さて『生徒生計調査書』では、同上の『学校一覧』で示されなかった点(比率表記も含む)が、やはり山口高商らの興味深い実態データだと思う。居住調(素人下宿45%、寄宿舎24%、自宅11%)、戸主との続柄調(長男34%、次男18%、不明15%、三男7%、弟7%、戸主6%)、趣味・娯楽調(計737人のうち音楽135人、読書99人、運動88人、散歩75人、キネマ57人、碁・将棋54人、不明51人、登山・旅行42人)、運動種類調(計737人のうち庭球130人、不明92人、登山・散歩69人、野球60人、水泳43人、蹴球42人)、嗜好調(計737人のうち果物252人、不明238人、菓子・パン類89人、煙草66人、ウドン22人、茶珈琲18人)、読書種類調(不明66%、経済10%、文学・小説5%、修養4%、宗教・哲学・社会4%、政治4%)、閲覧雑誌調(計737人のうち経済往来71人、キング56人、中央公論39人、改造27人、エコノミスト24人)、閲覧新聞調(計737人のうち大阪朝日365人、大阪毎日152人、大阪朝日・大阪毎日90人)などである。

ちなみに、調査データの取り纏め役を務めた教授の石津漣が、山口高商生であった折りの生活ぶりについては、「在学中の勉強ぶりは有名であった。学校の授業が終わると下宿に帰り、早目に夕飯を

とって県立図書館に行き、閉鎖後は下宿で十二時、時には一時まで勉強するという生活を三カ年間繰り返されたそうである」といわれている(高村忠也「石津先生の人と学問」神戸大学経済経営学会『国民経済雑誌』104巻3号、1961年、92頁)。そんな石津教授の山口高商生らへの口癖は、「豪華船の三等船客になるより、貨物船の一等船客になれ」であったという。

明治後期に興った女子の専門学校(10)

下田歌子の英国留学

ながもと ゆうこ
長本 裕子(ニューズレター同人)

下田歌子は、明治26年9月10日、内親王御用掛として、英国王室の王女教育と欧米における女子教育の視察研究を命じられて横浜港を出発した。インド洋・マルセイユ経由で、1ヶ月余パリ滞在後、英国ブライトンの私塾に寓居し、12月上旬ロンドンのミス・キヌヤード女史の私立女学校に入学した。歌子は、宮中奉仕時代にフランス語は少し学んだが、英語はほとんどできなかったからである。

間もなくロンドンで、上流階級のサムエル・ゴルドン夫人と知り合った。ゴルドン夫人は、東洋への造詣が深く、来日経験もあった。二人は意気投合し、歌子はロンドン中央街にある夫人の邸宅に寓居するまでになった。夫人を通して英国上流階級の人々と交流もできるようになった。夫人は一日も早くヴィクトリア女王に拝謁することを勧めてくれたが、謁見はすぐには叶わなかった。青木周蔵駐英公使の協力が得られなかったのだ。青木公使は欧化主義者で、ドイツ人を妻に迎えていた。それに対して、歌子は国粋派。しかも平安時代の女官の正装で謁見しようとしていたため、事が運ばなかったのである。留学期限が迫る中、歌子の焦りは尋常なものではなかった。

しかし、歌子は、ヴィクトリア女王への謁見の機会を待ちながら、英国の王族や貴族、一般の女学校などを視察した。英国の王女たちは、自ら子女の衣服を裁縫したり、病気の時も自ら看護したりして、決して子女の教育を人任せにはしない。13、4歳の王女が、ロンドン

市中の女学校で一般の女生徒とともに衛生・生理の授業を受けたりもする。ある伯爵家では子女たちが、乗馬をしたり、ボートを漕いだり、花を摘んだり、愛馬に馬草を与えたりして、野外で健康な体づくりと合わせて知徳の観念を養成させていた。留学の第一の使命である英国の王女・貴族の子女教育についての視察は十分になし得た。

ゴルドン夫人に同行して、公爵ポートルランド夫人邸などを訪問し、それらの貴婦人の紹介で、欧州各国の上流階級の視察も可能になっていた。しかし、肝心の女王への謁見が叶わない。歌子は上官の佐々木高行に、2、3年の留学延期を願い、命を賭して使命を全うしたい旨を再三手紙で訴えた。その一例を『下田歌子先生伝』より引用しよう。

(前略)只今、二十七年六月に於て、閣下に申上候事、五年の後其結果無くば、生きて再び閣下にまみえ奉らじとまで決心仕候に付、心事御賢察下れ度候。

「5年後に結果が出なければ、生きて閣下(佐々木)にはお会いしません」と、何と少しでもヴィクトリア女王への謁見を叶えたい、そのために留学延期を願う歌子の悲痛な叫びが聞こえてくる。佐々木もいろいろと苦慮するが、日清戦争勃発の恐れで国内が騒然としていることや、宮内省の要所にはキリスト教信者が多く、国粹派の歌子の勢力が強まるのを嫌う連中が多かったため、下手に動けなかったようだ。

歌子は佐々木では埒が明かないのを察知して、首相伊藤博文に直訴した。伊藤から歌子に朗報が届いた。

先頃長文の御書翰を落手致し、直に宮内大臣に留学尚一年を延期相成る様、及御依頼置候処、其後貴願御裁可相成候段同大臣より承知、定めし御満足の事と存候。(後略)

伊藤は宮内大臣に歌子留学1年の延期を依頼し、大臣が承知したという内容である。歌子はさぞかし狂喜したことであろう。こうして半年の延期が2回許された。渡英して1年7ヶ月、28年5月8日、ようやくバッキンガム宮殿で、ヴィクトリア女王への謁見が叶った。

その背景として、27年7月、長年の悲願であった条約改正問題の日英新通商航海条約が調印されたことや、28年4月、日清講和条約が調印され、日清戦争が日本の勝利となったことなどが幸いした。



桂袴姿の下田歌子
(写真は明治41年)

華やかに装った馬車が百数十両バッキンガム宮殿へ向かう。歌子も馬車を宮殿へと走らせた。約束の時刻がきて、官人から下田歌子の名前が朗々と呼ばれた。この瞬間、心がときめいた。女王は在位56年、70歳を過ぎてても白髪で気品があり、国民の尊敬を集めていた。歌子は日本の誇りを身に着けて拝謁したい思いから、王朝時代の女官の桂袴(けいこ)を着用した。桂袴とは小袖・袴・桂(うちぎ)の構成

で公家装束である。歌子の姿を、ロンドン・タイムス紙などが「戦勝国の女性の伝統の正装」として大きく取り上げた。歌子は留学1年半余で身につけた英語で、戦争のこと、日英条約のこと、東洋の婦道のことなどを奏上した。女王は歌子に非常に興味を持ち、その後も歌子をウインザー宮殿に招き談話したという。

謁見が叶い、夏が訪れる前にロンドンに別れを告げ、フランス、ベルギー、イタリア、オーストリア、ドイツを回り、再びイギリスからアメリカ、カナダを訪れ、28年8月20日横浜港に帰着した。

歌子は帰国して5年後の32年7月、実践女学校の開校に合わせるかのように『泰西婦女風俗』を出版した。留学中に観察した欧米諸国、特に英国の上中流階級の官私立女学校、大学等の教育、家庭のありさまや子女の教育について詳細に記述している。女子の教育について、

女子高等教育の進歩は、疑ひも無く社会の程度をして高からしめしに相違無く、又、各職工業、美術等の増進は、其女子が独立の生計を営み、又、其良人を助け、子女を教育するの裨補となり、下等貧民に在りては、漸次、彼等が飢寒の辛苦を離れて、自活の道を計るを得ること多き(後略)

女子高等教育は社会の程度を高め、実業教育は女子の独立生計に重要であると述べている。上流階級の女子は早く嫁ぐ者が多い。下層階級の者は自活しなければならず、小学校を終えると職に就く。学校教育を最も長く受けるのは中流階級の女子である。彼女らは教員や医師、著述家、新聞・雑誌記者等をめざす。実利実益を重んじる英国では、文学でさえ風雅の教養としてではなく、世に立つこと

を願って学ぶ。さらに、欧州諸国の女性も子女たちも体格が優れている。知育、徳育とならんで、体育を重んじるべきだと歌子は思った。

歌子の胸に、中流以下の一般女性の教育への情熱がこみあげてきた。こうして31年11月、歌子は華族女学校学監、内親王御用掛という重責にある中、帝国婦人協会を組織して、広く一般女性の教育をめざし、実践女学校の創設を準備する。

参考文献

『実践女子学園八十年史』

『下田歌子先生伝』故下田校長先生伝記編纂所 編集・発行

下田歌子著『泰西婦女風俗』

カレッジノベルの研究への道(7)

:日本の研究に見るカレッジノベル(3)

よしの 吉野 たけひろ 剛弘(埼玉学園大学)

前号では、『国文学 解釈と鑑賞』平成元年6月号の「特集＝近代文学に描かれた「青春」」に取り上げられた作品を概観した。今号では、それらのうち大学(およびそれに類する学校)(以下、大学と総称する)の学生が主人公となっているものについて、さらに検討していく。

前号で取り上げた41作品のうち、大学の学生を主人公とする14作品は以下の通りである。新たな情報をいくつかに加えてあるが、前号の表との比較を勘案して、番号はそのままにしておく。

4	徳富蘆花	『思出の記』	私塾から関西学院、帝大に進学
5	小栗風葉	『青春』	帝大生、交際相手は女学生
6	夏目漱石	『三四郎』	帝大生
7	島崎藤村	『春』	主人公のモデルは藤村(明治学院卒)
8	高浜虚子	『俳諧師』	主人公のモデルは虚子(高等学校中退)
17	梶井基次郎	『檸檬』	主人公のモデルは三高時代の梶井

20	尾崎士郎	『人生劇場＜青春篇＞』	早大生(中退する)
23	田宮虎彦	『足摺岬』	帝大生
24	中野重治	『歌のわかれ』	高等学校から東京帝大へ
29	北杜夫	『少年』	旧制高等学校生
31	福永武彦	『草の花』	高等学校時代の福永が 投影
33	伊藤整	『若い詩人の肖像』	高等商業から商科大学へ (途中に教員生活を挟む)
37	加賀乙彦	『帰らざる夏』	軍学校
40	三田誠広	『僕って何』	大学生

これらの作品がカレッジノベルと称しうるかが問題なのだが、そこから大学あるいは大学生生活の姿がどの程度読み取れるかということをも基準として考えていくことにする。以下、カレッジノベルと称さないでおいの方がよいものについて、その理由を述べていく。

7は作者である島崎藤村がモデルとはいえ、当時の作家たちをモデルに心の葛藤を描いたというべきものである。8も同様で、中学校を卒業して高等学校に進んだ虚子をモデルとした青年が、その過程で接してきた俳壇とその人間模様を描いたというべきものである。

17はある日の一瞬を切り取った短い作品であって、その主人公が高等学校生だったにすぎないから、カレッジノベルと称するのは

難しい。檸檬を見てさまざまな思いを馳せられるのは、高等学校に通うようなインテリ層だという考え方もあるのかもしれないが、高等学校に進学しそうな中学校5年生が思いを馳せても不思議ではない。

23は主人公が四国でお遍路をするのだが、そこにかかわる人間模様が主たる題材である。お遍路に出る若者は決して多いとは思われないが、帝大生のようなインテリ層に限った話でもない。

30の主人公は旧制高等学校の生徒で、その主人公のひと夏の体験がテーマであるが、まさしく「うぶ」な青年の甘酸っぱい体験と称すべき内容であり、旧制高等学校の生徒だからという問題ではない。

31は作品の大きなモチーフとなる手帳の筆者として学生が登場する。その手帳に書かれている内容にはインテリらしい若者の心の葛藤が現れてはいるものの、17と同様に学生だからという話でもない。

以上の点を勘案して、先述の表の14作品およびこれまで筆者が触れてきた作品を含めて、カレッジノベルと称しうるものの候補は以下の表の通りである(番号は振り直した)。

1	徳富蘆花	『思出の記』	私塾から関西学院、帝大に進学
2	小栗風葉	『青春』	帝大生、交際相手は女学生
3	夏目漱石	『三四郎』	帝大生

4	久米正雄	「競漕」	大学の体育会
5	久米正雄	「受験生の手記」	旧制高等学校受験生
6	尾崎士郎	『人生劇場＜青春篇＞』	早大生(中退する)
7	中野重治	『歌のわかれ』	高等学校から東京帝大へ
8	伊藤整	『若い詩人の肖像』	高等商業から商科大学へ (途中に教員生活を挟む)
9	加賀乙彦	『帰らざる夏』	軍学校
10	三田誠広	『僕って何』	大学生
11	宮本輝	『青が散る』	新設大学の学生
12	瀧上尚史	『八月の犬は二度吠える』	浪人生とその24年後

もちろんこれらの小説は全編にわたって大学生生活を描いているとは限らず、卒業(中退)後の状況が触れられているものもある。また、表にあるもののうち斜体のものは、大学に入る前の受験生を扱ったものである。

次号以降は、これらの作品をさらに掘り下げていくことにする。ただし、表の順番通りではないことをあらかじめ断っておく。

教育史研究のための大学アーカイブズガイド(20)

一金沢大学資料館一

たなか さとこ
田中 智子(早稲田大学大学史資料センター)

今号では金沢大学資料館を取り上げる。同館は博物館相当施設(2016年4月文部科学大臣指定)でありつつ、アーカイブズ機能も有する機関である。以下、その基本情報および所蔵資料について述べていく。

(1) 基本情報

金沢大学資料館は、金沢大学角間キャンパスの中央図書館棟内にある【写真1】。その歴史は同大学の角間キャンパスへの総合移転が目前に迫った1986年、大学が所蔵する歴史・美術・考古などの



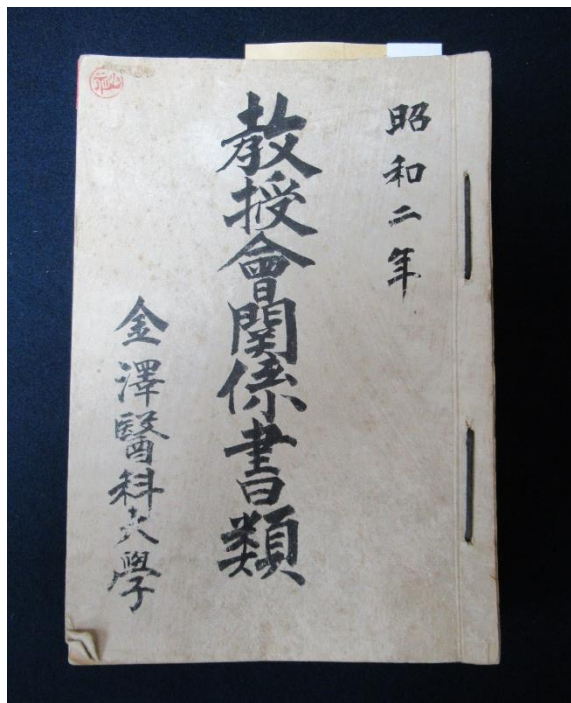
【写真1】金沢大学資料館(右手円形ドーム)

学術資料をどのように移転・保存するかについて検討するため、総合移転実施特別委員会に資料館検討小委員会が設置されたことに始まる¹。資料館検討小委員会が翌87年に提案した「資料館の基本構想」には、「人文科学関係の学術研究資料を系統的に収集整理保存してそれを研究し展示公開すること、および「総合大学の特性を發揮して自然科学関係の資料を積極的に展示公開し、専門を異にする諸分野の研究成果を交流して、学問的認識を高める」ことが目的としてあげられていた²。

基本構想はその後資料館設置準備委員会に引き継がれ具体化された。その結果、金沢大学資料館は1989年、学内にある人文・自然科学の学術資料を収集・展示する博物館類似施設として発足した。それに転機が訪れたのは2000年頃、開学50周年の際に設置された金沢大学50年史編纂室が閉室するにあたり、同室の所蔵資料を資料館で引き取ることとなった。折しも情報公開法が施行されたこともあり、2001年からアーカイブズ機能も付加され現在に至る³。

金沢大学資料館規程によると、同館の目的は「金沢大学及び本学の前身校に関わる資料を収集、整理及び保存並びに展示、公開し、教育研究活動に資するとともに、本学の管理運営、学生・職員の自校教育、社会貢献及び地域文化の発展、向上等に寄与するための情報を提供すること」であり、その目的を達成するために、(1)資料の収集、整理及び保存並びに展示、公開、(2)研究会、講演会等の開催、(3)他機関等との相互交流などの業務を行っている⁴。博物館相当施設であるので、展示業務がメインではあるが、資料の閲覧業務も行っている。以下、同館の所蔵資料について紹介していく。

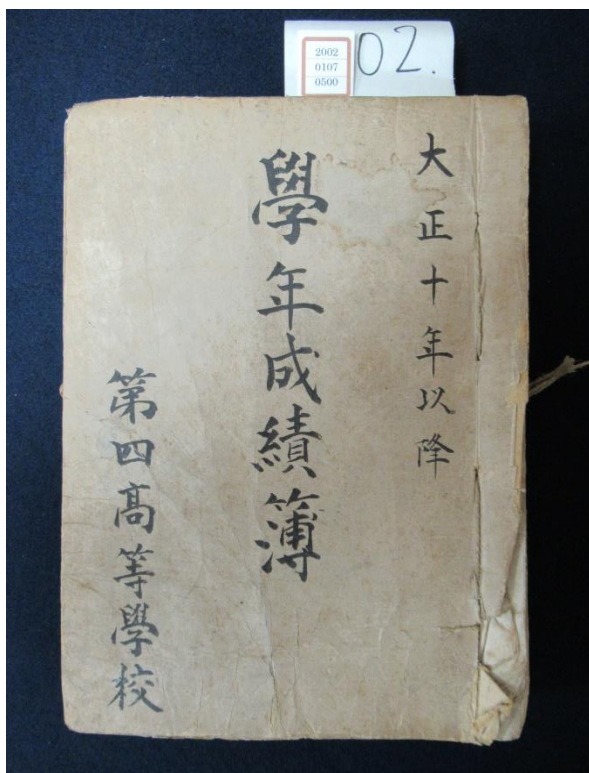
(2) 資料紹介



【写真2】「教授会関係書類 金沢医科大学」

同館所蔵資料のうち、筆者が紹介したいのは以下の3点である。1点目は「教授会関係書類 金沢医科大学」である【写真2】。これは表題の通り、金沢大学の前身校の一つである金沢医科大学の教授会記録である。内容は入学試験、時間割、教員人事など、大学の内部行政全般にわたる。同館では1923年の開学から戦後学制改革によって金沢大学医学部となるまでの教授会記録を一通り所蔵している。戦前・戦中の医科大学における研究・教育等を調査する際には必見の資料である。

2点目は、「学年成績簿 第四高等学校」である【写真3】。これも文字通り成績簿で、中を見ると諸課目平均点、席次、出身中学校、姓名が書かれている。同館では1921年から28年、1937年から41年までの成績簿を所蔵している。ここに記載されている情報と『第四高等学校一覧』等に掲載されている卒業生名簿を照合することによって、成績と進学先との関係等を調査することができるだろう。



【写真3】「学年成績簿 第四高等学校」

3点目は、「学校日誌 金沢高等師範学校」である。金沢高等師範学校は、戦時下に増設された高等師範学校の一つである⁵。同館

には開校直前の 1944 年 3 月から新制金沢大学に統合される 1949 年までの日誌が所蔵されており、開校から閉校に至るまでの一連の校内の動きを見ることができる。

なお、1944、45 年の学校日誌は、8 月 23 日まで開催中の企画展「塩野直道と『緑表紙』—金沢高師第 2 代校長と伝説の教科書—」にて展示中である【写真4】。



【写真4】「学校日誌 金沢高等師範学校」(展示中の様子)

(3) 資料へのアクセス方法

(2)で紹介した資料は、「金沢大学資料館所蔵非現用法人文書データベース」(<http://archive.w3.kanazawa-u.ac.jp/>)にて検索可能である。閲覧については、利用案内・各種申請のページ(下記)を参照のうえ、注意事項を確認のうえ早めに申込みをしていた

だきたい。

また同館の展示については、年3回の企画展に資料館特別展、学内外への出張展示、さらに学芸員資格取得に必要な博物館実習の授業の一環である学生展と、実に多くの展示業務を行っている。同館の展示室は月曜から金曜（祝日、その他臨時休館日を除く）の10時から16時まで開室しているので、ぜひ一度足を運んでみていただきたい。

TEL:076-264-5215

Fax:076-234-4050

E-mail:museum@adm.kanazawa-u.ac.jp

利用案内・各種申請:

https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=66

(つづく)

- 1 「金沢大学資料館集報」(『金沢大学資料館だより』第1号、p.8)
- 2 金沢大学資料館ホームページ「金沢大学資料館の歩み」
(https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=71)
- 3 金沢大学資料館ホームページ「ごあいさつ」
(https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=71)
- 4 「金沢大学資料館規程」第2条、3条
- 5 金沢高等師範学校の設置については、谷本宗生『学都金沢形成の様相 一近代日本官立高等教育機関の設置過程一』(2018年)第3章第3節「金沢高等師範学校の設置過程」に詳しい。

木下広次をめぐる史料(2) — 「国の維持力(1899年躬行会例会)」(2) —

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

木下広次に関する重要史料の一つとして、木下広次「国の維持力(昭和三十二年二月十三日躬行会例会ニ於テ)」(『武士時代』第1巻第3号、1902年6月、60頁～68頁)を紹介している。

前号では、他の国民を教導訓育する智力と道義をもった国民のなかの勢力を「国の維持力」と名付け、この勢力の有無が国の存立にかかわると木下が述べていたことを見てきた。

木下は「国の維持力」をこのように定義した上で、この史料のなかでイギリス、ドイツ、仏蘭西の事例を挙げながら日本の「国の維持力」について、論じていく。

封建諸侯が豪富に移行して維持力となったイギリス

最初の事例としてイギリスの「国の維持力」が取り上げられている。木下は、イギリスの「国の維持力」となっているのは、封建時代の領主が近代の「豪富」つまり大資本家になった集団であるとして、木下は次のように述べている。

英国の維持力は、英帝室にあらす英政府にあらす上下議院にあらすして英国国民中極小部分の豪族即ち金持であると断案を下しますご存じの通り英国豪富の歴史は即ち英国封建史であつて今日の富豪は昔日封建の諸侯伯にして地方割拠の状態を脱却したる迄のものであつて矢張り富の威光を以て英国国民の儀表となり英国を負荷して立て居り英国を寝せ起して居ります

る所謂英国の輿論なるものは彼等の意向の発表されたるもので政府も議員も彼等が意志の表白所と見れば差し支へない随て英国の所謂輿論政治が何等の紛擾を来さず整然として施行され居ることも始めて理解し得る訳でございます¹

畢竟今日英国の富強にして商権を世界に振り大陸諸国を相手にして名声を失墜せざるは豪富の維持力あるからでございます²詰り豪富が今日の英吉利国を組織して居るのであります²

ヨーロッパの近代国家における「国の維持力」を封建時代との関係から分析しようとしている点が、日本との比較が容易になっていて興味深い。このイギリスの封建領主は、日本であれば各藩の藩主ということになるだろうか。そうであれば、封建主義の時代にあつては、イギリスと日本の「国の維持力」には共通点があるかもしれない。

しかし、近代のイギリスでは旧封建領主が大資本家として「国の維持力」としての影響力を保持しているのに対して、この史料が書かれた明治期後半の日本では、旧藩主の影響力はそこまで高いとは言えないだろう。そうであれば木下にとって、イギリスの事例は、明治期後半の日本における「国の維持力」の模範とはならなかったと考えられるだろう。

中世武士気質が継続するドイツ

次に木下は、ドイツの「国の維持力」を次のように紹介している。

次に独逸帝国は如何にと申すに是れは封建を去ること遠からぬ模様で或る点から観察すれば尚ほ未だ封建に属すると申した方が妥当でございます随て中年代の武士気質が独逸に勢力を占め

て居りまして青年の結社及び大得意の決闘即ち法律は禁じても
事実は禁ぜない所の決闘の流行は慥に武士的慣習の相伝され
て居る明証であつて輪郭の君主及田舎の大小名は今も尚ほ相伝
の古城旧寨に当時の尊厳を失はず自ら武士氣質の鼓吹者となつ
て居りまして此の貴族と武士氣質とが今日独逸国の維持力でござ
ります武士氣質は規律的訓練に接近するものでござりますから
して軍隊の強大諸制度の整頓其他百般の事が皆な規則的に出
来上つて居るように思はれます³

木下は、19世紀末ごろにドイツが封建時代からそれほど離れおら
ず、封建領主の古い居城が存続し、地方領主と「武士氣質」を引き継
ぐ大学生がドイツの「国の維持力」となっており、こうした勢力の「武士
氣質」が規律的訓練に結び付いて、ドイツの「国の維持力」となってい
ると述べる。

ドイツの19世紀後半においても大学生が引き続き決闘好きであつ
たことが、当時のドイツの「国の維持力」を象徴しているということにな
るのかもしれない。

こうしたドイツの状況も、木下にとって直接の模範とはならなかつた
かもしれない。後述するように、江戸時代の武士のモラルは明治期に
は大きく変質してしまつたと木下は認識していたからである。

では、第3の事例として取り上げるフランスの「国の維持力」につい
て木下はどのように捉えていたのだろうか。これについて、次号で見
ていきたい。

¹ 木下広次「国の維持力(昭和三十二年二月十三日躬行会例会ニ
於テ)」(『武士時代』第1巻第3号、1902年6月、61頁。

² 同前掲書、62頁。

³ 同前掲書、62頁。

体験的文献紹介(3)

—漢文学習のテキスト—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

1953年4月、私は大学院文学研究科教育学専修博士課程の一年次生になった。新制大学院の博士課程第1期生になったわけである。教育学専修で修士論文を提出したのは私一人だったので同専修の博士課程も私一人であった。修士論文の審査が終った三月の末日、原田先生に呼ばれて新しい博士課程に入るように言われた。形式的な面接が終った4月10日、博士課程入学の通知がきた。後に聞いたところによれば、上村福幸教授が急に亡くなられた後、後任が決まらず、博士課程の開講がなかなか決まらなかったそうである。後任の長谷川亀太郎教授が決ったのが三月の終わりで開講の手続きが遅れ、唯一の修士取得者である私に声がかかったのであった。

4月某日、文学研究科の博士候補生(当時、大学院博士課程の新入生のことを事務局ではそう呼んだ)11名に対し、ギリシャラテン語と漢文の試験をするという通知があった。当時の早大大学院はカリキュラム上の確かな方針がなく、その場の対応策として思いつきのようなことをした。語学力が低いので、応急の手当てをしようと思ったのかも知れない。英文学、ドイツ文学、フランス文学、ロシア文学、西洋哲学はギリシャラテン語、中国文学、日本文学、日本史、東洋史、東洋哲学は漢文、演劇学、美術学、教育学、心理学専修はどちらでもよいということであった。私は躊躇なく漢文を選んだ。試験当日はできたばかりの大学院生図書室に文学研究科の博士候補生が集められ、各専修別々の問題が配られた。図書室には各種の辞書が置いてあるから、何をみてもよいということであったが、90分でこれだけの分量を和訳するには辞

書など引いている暇はなかった。漢文を受験したのは後に東洋哲学の教授になる菅原信海君と中国文学の教授になる松浦友久君と私の三人であった。菅原君や松浦君には和大袋綴の書物で、ここからここまでを和訳せよというものであったが、私に出されたのはガリ版刷りの漢文であった。無点の白文で手も足も出なかった。数日後、尾形先生から呼び出され、大学院に漢文の授業が開設されるから受講するようにと命じられた。この年から古典の読めない大学院生のためにギリシャラテン語と漢文が開講された。これは修得単位にならない授業で大学院生に対するサービスのつもりであったらしい。尾形先生に命じられていなくても、漢文学習の必要を痛感していたから、私は進んで受講した。以後5年にわたる私の漢文学習がはじまる。

担当は教育学部の大矢根文次郎教授であった。毎週土曜日の午後1時から90分行われた。受講者は新入りの修士課程生を含めて12、3人であった。毎回、ガリ版刷りの白文が配られる。李白の『春夜宴桃李園序』のように知られた文が出るかと思うと明代の大衆小説『水滸伝』の一節も出るし、梁啓超の『清代學術概論』の一節も出た。指名されれば、和文で読まねばならない。漢文専攻の2、3人はすらすら読むが他は四苦八苦の態であった。あまりにできないので、いつの頃からか、一週間前に渡す白文を次回までに読んでくるように命じられた。その際、書き下し文を提出しなければならない。この修行は漢文上達に効果があった。

後期のテキストは明治書院版・簡野道明編『古文真宝粹』であった。『古文真宝』は七国より宋に至る詩文を宋の黄堅が編集したものである。その中から日本の漢学塾等で愛唱された名文を簡野道明が編さんした。割注や頭注があり、返り点もあるが送り假名はない。和文書き下しの稽古には格好のテキストであった。

早大大学院に入った頃、ある人の伝手^{つて}で杉並区にある私立城右中学校高等学校の非常勤講師になった。週二日、一日3時間ずつ中学生の英語を教えた。この学校の創立者で校長である河野通禰太先生はまことに風変りな魅力的な教育者であった。東京帝国大学文学部の支那哲学科を出て学習院高等科の漢文を教えていたが、生徒が高慢^うちきで生きだと喧嘩して辞め、つぶれかかった裁縫女学校を買いとって、この城右高等女学校をつくった人である。全生徒に英語と漢文を教えていた。毎朝の朝礼では論語の一節を読んで解釈するのだが、通り一辺の解釈でなく、日常生活に即した当意即妙な講話になっていた。校長室を持たず教員室のど真ん中に置かれた大火鉢の側に座を占めて、教員たちと喋りまくる。面白い校長であった。非常勤講師はみな大学院の学生だった。よく研究の状況を聞かれた。ある時、漢文の学習で苦しんでいると話したら、“そんなら家^{うち}において”と10分程歩いた所にある先生の邸宅に連れてゆかれた。それからここでも5年にわたる漢文素読がはじまるのである。

先生が示されたテキストは『大学』『中庸』『論語』『孟子』と司馬遷の『史記』であった。これは儒学学習の常道である。儒学の中心にあるのは経学で、その基本は四書と言われる学(大学)庸(中庸)論(論語)孟(孟子)で、この順序で素読する。『大学』は字数が少いから最初に読み、『中庸』に進んで一番大切な『論語』を読んでから最後に難しいが名文の『孟子』になる。『孟子』は論理^たに長け、魅惑的だが危険だと言って若者に読ませない学派もある。この四書は一字一句落とさず完読しなければならない。人生に必要なことがつまっているからである。しかし人生というものは道理どおりにゆくものではない。人は過ちを犯すし、非道も行う。そうした事実を冷静に観るのが歴史である。ゆえに学者は経学を学ぶと同時に史書を読まねばならない。ただし史書は経書のように緻密に読む必要はない。速読し多読した方がよい。こう

して精読熟読する経書、多読速読する史書という学習法が考案されたのである。

『大学』と『中庸』は中国学術研究所編、昌平堂出版の『大学中庸』であった。白文なので簡野道明著・明治書院版の『大学解義』『中庸解義』の助けを借りて読んだ。『論語』と『孟子』は簡野道明著、明治書院版の『論語ろんご集註』『孟子集註』を読んだ。週一回、河野先生のお座敷で5時から6時まで一時間、一人で音吐朗々と読まねばならない。この書は朱子の割注が至るところに書かれている。返り点はあるが、送りがなはない。自分で和文に読み込まねばならない。しかも朱子の割注も含めてすみからすみまで一字も落としてはならない。先生は読み方の誤りは声を張り上げて正すが、講釈はしない。読んだというのはわかったということだ。これが朱子学流の素読だよと先生は言われた。

第1回「ニューズレター・コロキウム」

(2019年6月2日)の記録(梗概)

かとう ゆうだい
加藤 雄大(日本大学大学院)

ニューズレター・コロキウム(1)

——旧制中学校の生徒「自治」研究をめぐる——

話題提供者: 富岡勝

指定討論者: 谷本宗生、神辺靖光

会 場 : 神辺靖光会員私邸

2019年6月2日、神辺靖光会員の私邸にて、第1回「ニューズレター・コロキウム ——旧制中学校の生徒「自治」研究をめぐる——」が開催された。参加者は神辺靖光会員、富岡勝会員、谷本宗生会員、猪股大輝会員、田中智子会員、加藤善子会員、雨宮和輝会員、加藤雄大の8名であった。以下では、当日のコロキウムで行われた議論の内容について記していく。

はじめに、企画者の一人である谷本宗生会員より、このコロキウムの趣旨が説明された。このコロキウムは、ニューズレター会員が各自で取り組んでいる研究について重点的に議論することで、各自の研究をより深めていくための機会となることを期待して開催されるとの説明があった。

その後参加者の自己紹介を行い、コロキウムが始まった。討議にあたり、はじめに、指定討論者である谷本会員、神辺会員より論点が提示された。

谷本会員からは、主として次の4点の論点が示された。第一の論点は、研究対象の選定の基準についてである。富岡会員の研究では、明治中期の第

一高等学校校長であった木下広次や明治後期の松本高等学校の校長であった小林有也、大正～昭和初期の東京府立中学校校長の川田正激などが研究対象として設定されているが、研究対象とする人物や事例を選定する際に、どのような基準を設けているのかという点について質問があった。

第二に、富岡研究において、教育史上の「特異点」と「共通性」のどちらに着目するのかという論点である。すなわち、特定の地域や時代に特有だったものを描写するのか、あるいは当時の全国的な傾向に着目するのか(またはその両方に着目するのか)という点は重要であり、今後の研究でその方向性を示してほしいとの指摘であった。

第三に、富岡研究で着目されている「自治」という用語の意味合いについて指摘があった。ここでは、旧制中学校における「自治」とその他の学校における「自治」は同じものとみなしてよいのかどうか、という点が質問として示された。

第四に、富岡研究の「出口・入口」論についての指摘があった。つまり、そもそも当時の校長らは「自治」的な着想をどこから得て、学校運営に活かしていたのかという「入口論」と、生徒の「自治」を認めるにあたって、校長としてどのような教育方針で生徒と向き合ったのかという「出口論」が、「自治」の本質を探る上で重要になってくるという指摘である。これらの指摘を踏まえて、最後に、富岡研究と谷本研究の方向性に重なる部分が多くあるというコメントがあった。

続いて、神辺会員からは、大きく分けて次の3点が論点として示された。

第一に、神辺会員より、富岡研究の強みは、当時の校友会誌を丹念に読み解いている点にあるとのコメントがあった。神辺会員によれば、明治後期の中学生が執筆している校友会誌は、文章としてそれほど洗練されていないために、その記述内容の意図がつかみにくいという。その意味で、その点を丹

念な史料分析を通じて乗り越えている富岡研究は高く評価できるとのことであった。それを踏まえて、今後の教育史の方向性として、校友会誌をどのように扱うべきかという論点が提示された。すなわち、先述の理由により校友会誌の記述内容の分析が困難であることから、各誌の題目をピックアップすることで、校友会誌全体の議論の傾向性を見ていく、という方法があり得るといふ趣旨の指摘であった。

第二に、富岡研究で検討の対象として取り上げられている各校長の履歴の違いが重要であるという指摘があった。例えば、小林有也は帝国大学の出身で、理学士の学位を持つ数学者であったが、その小林が松本中学校の校長になっているということは重要である。その当時の帝国大学卒業生の中で中学校の校長になった例はきわめて少なく、その中でも理系の学位を持つ卒業生が旧制中学校の校長になったケースはさらに少ないという。また、川田については海南学校という陸海軍の士官を養成する旧藩の学校の出身で、帝国大学や高等師範学校を卒業していないにもかかわらず校長に就任しているという点が特徴的であるとのことであった。

それらを踏まえて、最後に富岡研究の手法はどちらかといえば思想史的なものであるとのコメントがあった。神辺会員からは、思想史的手法で研究を行うことも重要ではあるが、今後の研究ではその時期の中学校の実態、例えば当該中学校の生徒数や生徒の出自(土族か否か、当該県人と他府県人との比率等)や当該中学校の立地条件(大都市か旧城下町か)等のデータを示してほしいとの要望があった。

その後、富岡会員より現状の到達点と今後の方向性について報告があった。

富岡会員からは、一連の研究の中で「自治」という語を括弧に入れていることの理由について説明があった。すなわち、それぞれが「自治」という同じ

語を用いている、人によってその意味や文脈が異なるため、現時点では自治という語を括弧に入れているという。今後の研究を通じて、その括弧を外して説明ができるように概念の整理をしていくことが目標の一つであるとのことであった。ただし、概念を整理するといってもそれは単純に「白か黒か」の二分法で「自治」という概念を整理していくのではなく、「自治」という言葉のはざままで人々が揺れ動いている姿を、教育史的な手法を用いて明らかにしていきたいとのことだった。

その後、参加者全員を交えた意見交換やディスカッションが行われた。神辺会員からは、現場の実践家としての「校長」という存在を教育史上の問題として主題に据えた研究は、これが初めてかもしれないというコメントがあった。その他、猪股会員からは、地方教育史における大阪府の位置づけや地域性についての議論があった。

最後に、次回の開催日は未定であるが今後も定期的で開催していくことなどが参加者の間で確認され、およそ4時間30分にわたり白熱した議論が展開された第1回のニューズレター・コロキウムは、盛会のうちに終了した。



(当日の議論の様子)

コラム
ニューズレター・コロキウム
で私が得た収穫

かんべ やすみつ
神辺 靖光
(ニューズレター同人)

今回のコロキウムで私は指定
討論者に選ばれたので改めて冨
岡氏の論考をまとめて読んだ。そ
こから私は多くの知見を得たが、
私が目下すすめている明治前期
の中学校形成史の研究に関連し
て氏の論考から得た収穫を

1. 中学校形成史における訓育(生徒指導)のはじまり
2. 訓育を組織化する学校長の登場
と仮題して素朴な感想を述べたい。

私は数十年来、日本の中学校史を考えてきたが、ここ10年間は明治前期という約20年間に時期を限定してきた。それは中学校をつくりあげる要素が、①誰がどのくらいの規模の学校をつくるのか(設置問題)、②中学校で何を教えるのか(カリキュラム問題)の二つで、およそ20年間、議論したり、試行錯誤を重ねてやっと明治20年代になってほぼ全国各府県に尋常中学校ができ、ほぼ共通の授業が展開されたからである。従って私の『明治前期中学校形成史』は①府県立、町村立、私立学校の混乱から府県立学校への収束と府県会との対立と協調、②教育課程の形成と等級制の授業形態の二つを共通の着眼点にしてきたのである。しかし尋常中学校が成立してから学校の財源は府県の地方税によって安定し教育課程がほぼ完成したので教員と教科書の供給がスムーズになって中学校の外形的な進歩発展は軌道に乗ったのである。

このように安定した発展が約束されるとまず生徒が急増しはじめた。1889年の数値で一校の生徒数の多い学校をみると東京526、京都369、

徳島367、佐賀362、大阪326人である(『文部省第17年報』)。一般に一校200人台が多い。1880年代はじめ、やっと府県立中学校がはじまった頃の生徒数は一校100人が精一杯であった。それもきびしい等級制で生徒は初等科低級に堆積し、高等科生徒なし、あっても一、二名という学校が多かったのである。

そのような小規模学校でも不祥事はあった。群馬県中学校ではある年、落第した数人の生徒が抜刀して校長を脅したり、名古屋の中学校生の進学率がよいと聞いた金沢の中学生が集団退校して愛知県へと雪の中を歩き続けたとか今日では考えられない珍事、無秩序が横行していたのである。こうした無秩序を匡すべく、学校は罰則を設けたり、優等生を助教に仕立てて学校秩序の維持につとめたが、当時の生徒は年齢幅が広く下級生でも徴兵にかかる者が多いので学級を維持することがむずかしかった。生徒総員100名前後の時さえ無秩序なのに生徒数500名を超えるようになった東京府尋常中学校長勝浦軻雄が学校の秩序回復のためまず学級担任制を考え出したことは時宜を得ている。同じ頃、大阪府尋常中学校でも学級担任制(級頭という)をはじめた。尋常中学校は従来の等級制に学年制を併立させ、落第生を減少させたから1年生から5年生までのクラス人員が平均化するようになったのである。勝浦校長はその上に、やたらに罰則を設けて秩序を守るのではなく、生徒自らが自分たちの秩序をつくる自治を教え、自らが国家中堅の紳士たるヨーロッパ風エリート養成の教育をしようとした。その機構として校友会がつくられ、文芸スポーツなどのクラブが懲慥された。これを皮切りに明治後半期に全国の尋常中学校が学級担任を置き、校友会クラブ活動が盛んになっていくのである。

私立学校長は自らが創立者である場合が多いから確たる教育理念を持ち教育指導をする。しかし府県立中学校の校長はこれまで府県学務課の幹

部が臨時に校長を務めることが多かった。文部省や府県会との交渉事務が多かったからである。東京府も大阪府も尋常中学校になるまでの校長は府学務課の吏員で交替が多い。尋常中学校になってはじめて教育家らしい校長が現われるのである。富岡論文で勝浦校長が大きくとり上げられたのは中学校形成史研究からみて意義あることである。勝浦校長の登場と時を同じくして高等師範学校が成立し、尋常中学校長と幹部教員を専門に教育することになった。よって以後、専門家としての中学校長が輩出するようになる。中学校形成史研究の明治後期編は各学校の現場指導者である学校長の教育思想や実践が主要課題になるのではないかと胸が高鳴る。

明治後半期になると中学校の設置には方式が定まり、府県それぞれの財源と府県民の進学希望率によって逐次増加していった。校舎建築の規準も定まり教員の配置もとどこおりなく行われるようになった。教員課程も微調整はあるが明治前期のような大変更はない。明治後期の中学校形成史のテーマの一つは生徒の自主活動 — 校友会クラブ活動 — になるだろう。今回のコロキウムから得た私の収穫である。

【ご案内】 旧制松本高校創立100周年! 今年のテーマは「寮」

旧制高等学校記念館「第24回夏期教育セミナー」8月17日・18日

かなざわ ふゆき
金澤 冬樹(記念館資料研委員・東京理科大学事務職員)

24回目を迎える夏期教育セミナー。今年は、旧制松本高等学校が創立100周年、信州大学が創立70周年を迎えます。そんな記念すべき今年のテーマの一つが「寮」。旧制高校の学生生活において、寮生活は大きな比重を占めていたとされています。また、近年は学生寮の教育的な側面が見直され、全国の大学で学生寮の新設が相次いでいます。

松本にある思誠寮は、旧制松本高等学校から現在の信州大学にいたる長い歴史を持ち、今日も独自の寮文化が生きています。寮は学生にとっていかなる空間となりうるのか。歴史を振り返るとともに、これからの学生寮の在り方をも射程に収めることができる会になればと思っています。

《開催概要》

- 日時:2019年8月17日(土)・18日(日)
- 場所:松本市 あがたの森文化会館(旧制松本高等学校校舎)

《スケジュール》

【1日目】8月17日(土)13:30開会

●基調講演

「近代教育資料の可能性と課題—旧制松本高校を中心に」

講師:渡邊匡一さん(信州大学 副学長・附属図書館長)

●記念座談会

「思誠寮の青春—旧制松本高校～信州大学3世代の体験談を通じて」

講師：思誠寮の卒寮生3名

⇒3世代の寮生活を見つめ、世代間の相違や類似を考えます。

●懇親会(希望者のみ)

【2日目】8月18日(日)9:25開会

●研究発表会

①「旧制松本高等学校時代における辻邦生の創作

—寮雑誌「思誠」・日記「園生」を視座として」

発表者：富田ゆりさん(学習院大学史料館 学芸員)

②「旧制高等学校の教育システムと教育方針—第四高等学校長

溝淵進馬と第二高等学校長阿刀田令造を事例として」

発表者：谷本宗生さん(大東文化大学 准教授)

「第二高等学校および第四高等学校の学生生活・寮生活」(仮)

発表者：田中智子さん(早稲田大学大学史資料センター)

③テーマ「一高校長時代の狩野亨吉—教養学部前史として」

司会者：折茂克哉さん(東京大学駒場博物館 助教)

「明治30年代の一高」

発表者：田村隆さん(東京大学 准教授)

「狩野亨吉と旧制一高医学部」

発表者：丹羽みさとさん(立教大学助教)

「第二臨時教員養成所—一高における教員養成」

発表者：川下俊文さん(東京大学大学院 博士後期課程)

●旧制高校卒業生による記念館展示の解説ツアー

⇒当時の貴重な経験談とともに、旧制高等学校記念館の展示資料の解説を行っていただきます。

●研究情報交換会(希望者のみ)

⇒自己紹介、問題関心の所在などの意見交換を通じ、参加者間の交流を目指します。

《ご参加について》

- ・参加費無料。ただし、懇親会および2日目昼食の希望者は、記念館への事前申し込みが必要。
- ・近年、初めて参加する方が多くなっております。ぜひお気軽にご参加ください。
- ・懇親会の申し込みなど、詳しくは旧制高等学校記念館までお問合せください(記念館HPにも詳しい記載がありますので、ご参照ください)。

今回ご紹介するのは、三好信浩(広島大学名誉教授)さんが記した「戦前期産業教育の地域実態」『日本の産業教育 歴史からの展望』(2016年、名古屋大学出版会)です。昭和期の敗戦に至るまでの産業系の高等教育機関、とくに官立の実業専門学校の全国的配置の状況を、まず次のように指摘しています。「大学よりさらにバランスのよい地域配置となった。工業系の専門学校から官立校に転換した明治専門学校も含まれる。そのうち東京と大阪の高等工業学校は工業大学に昇格した。一九三九(昭和一四)年になると工業人材の需要がさらに高まり、室蘭から久留米までの地方都市に七校の高等工業学校が追加された。一旦工業大学に昇格したものの、四年後には大阪帝国大学工学部となり、専門学校のなくなった大阪にも、その年に高等工業学校が復活した。追加七校の中に含まれる。農業系の官立専門学校も地域の農業事情に適合した配置がなされた。高等農林学校は盛岡から鹿児島まで八校、高等蚕糸学校は東京・上田・京都の三校、それに千葉の高等園芸学校、函館の高等水産学校、帯広の高等獣医学学校など、その地域も種類も配慮されていた。商業系の専門教育もまた適正に配置された。高等商業学校は小樽から長崎まで一三校設けられ、そのうち東京と神戸の二校は商科大学に格上げされた。…地域別に見ればバラツキは少ないものの、道府県別に見れば、官立学校の設置状況には厚薄のちがいが生じた。…官立高等教育機関の存在しないのは、青森、埼玉、奈良、島根、岡山、高知、佐賀、沖縄の八県である。府県によっては、実業専門学校よりも高等学校の設置を希望するところもあり、奈良と沖縄を除く六県には官立の高等学校が設けられたという事情も考慮に入れる必要がある」とします(292~293頁)。

さらに「地域間格差の発生要因」の1つに、「中等教育の進路状況」を挙げ、「進学者が普通教育と産業教育のいずれを選択するかについて言えば、道府県の格差は大きい。普通教育の中核をなすのは中学校と高等女学校であって、これを含めた中等学校進学者の中で、工業学校の進学者の比率の高いところは、大阪府の一八%を筆頭に愛知県の一五%がこれに続き一〇府県が一〇%を越えるのに対して、最低の千葉県は二%である。農業学校はそれより格差が広がり、最高の長野県は二七%であるのに対して、最低の東京府は〇・八%、大阪府は一・〇%である。一二県は一五%を越えているので、工業学校よりも上下の差は大きい。商業学校はさらに最高の比率は高まり、愛知県三三%、東京府三一%、大阪府二四%となるが、最低値は鳥取と沖縄の五%である…比率は工業や農

業よりも高くなり、産業系学校の中では最も進学者が多い学校ということになる。道府県間における普通系学校と産業系学校の格差、さらには産業系学校における工・農・商の格差がいかなる要因によって発生するのかは分析のむずかしい問題である。予想されるのは地方住民の教育意識のちがひによるであろうが、寡聞にしてその種の調査研究の資料は見当たらない」と評します(302～303頁)。ちょうど私(谷本)が全国地方教育史学会で話題として取り上げた山口の場合、官立の高等教育機関として、すでに山口高等商業学校、山口高等学校を有していて、1938年に政府の高等工業学校増設の動きとして山口市が候補地として挙げられた際には、「山口市は文部省の要求する土地や資金を提供し得る財政的余裕を持たなかった」ことにより、県内の宇部市に官立の高等工業学校が設置されることとなります(『官立宇部高等工業学校の創立』『創基200周年 山口大学の来た道3』2013年、山口大学、57頁)。(谷本)

次に、2019年8月刊行の神辺靖光『女学校の誕生 女子教育史散策 明治前期編』(梓出版社)を、レター同人の刊行著作として「速報」でご紹介してみよう!と思います。著者の神辺さんによれば、我われの『月刊ニューズレター』の創刊号から47号までに投稿した内容をもとに纏められたものといえます(同書まえがき、1頁)。なおいただいた同書刊行のご案内状には、1964年に自費出版として『明治初期 東京の女学校』を纏められてから、神辺さんご自身の研究領域が主として明治前期の中等学校史へと移りながらも、「明治の女学校への関心は脳裏を去ることはありませんでした」と吐露されています。そして、このニューズレターの同人として「明治初期 東京の女学校」という問題意識を、さらに延長拡大し深めようと思ひ、学校沿革史や伝記等を介して「逸話と世評で綴る女子教育史」を連載していったとあります。なぜ中等教育史家である神辺さんが、女子教育史を連載し始めたのか?といった謎が、まさしく合点がいきました。

そして本書では、「女子教育史散策」をサブタイトルにあえて付け、読者にも読みやすく、まえがき(1頁～)・プロローグ(3頁～)・女学校のはじまり(21頁～)・横浜と東京で女子の英語学習はじまる(49頁～)・女紅場をめぐるさまざまな世相(79頁～)・国漢学系の女学校(117頁～)・東京築地にできたミッション女学校(141頁～)・神戸英和女学校、同志社女学校と函館遺愛、長崎活水の女学校(167頁～)・女子師範学校(191頁～)・中学校と並立する高等女学校の芽生

え(223頁～)・裁縫手芸系の女学校(253頁～)・エピローグ(289頁～)、といった内容構成にしています。

実は私(谷本)も、かつて「ジェンダー問題と女子教育」『新訂わかりやすく学ぶ教育制度 課題と討論による授業の展開』(2010年、啓明出版)を記しています。そのなかで、「戦間期日本の女子教育」として、主な女子専門学校の類型を、大きくみて宗教・文学的な教養教育を重視する学校、良妻賢母の思想のもと裁縫・家政系を重視する学校、医・歯・薬学系の専門職業教育を重視する学校、その他の学校(体育・美術・商業など)、と示しました(拙著156～157頁)。私が分類した女子専門学校の類型と、神辺さんがきついろいろお考えになっている女学校類型との関係性についても、個人的にはちょっと興味あるところです。

そして、神辺さんの本書のなかでもとくに触れておきたい点は、やはり「まえがき」で示されている神辺さんの問題提起です。日本教育史研究が、第一次資料などにに基づき精緻な研究として進展したいっぽう、神辺さんいわく、「負の面」も残念ながらあらわれていると指摘しています。研究上の緻密さの代償ともいうべきか、教育・学校としてのトータルな変遷を検討すること(大きな動きを捉えた教育通史)から離れ、木を見て森を見ずに陥りやすい傾向にあるといいます。そこで、逸話や回想といった資料を本書ではできるだけ取り上げて、読者に共感してもらえるような、読んでいて面白かったと実感してもらえれば・と企図したそうです。したがって、堅苦しい学術書というスタイルでなく、教育史研究を土台にした随筆として「本書が多くの人の眼にふれ、読んで頂ければ」と、著者の神辺さんは強調しています。(谷本)

『京都大学新聞』第2627号(2019年7月16日付)掲載の「吉田寮百年物語」(文責は元寮生などからなる吉田寮百年物語編集委員会)連載第1回を少し早めに入手したので紹介いたします。この連載は、明け渡し訴訟(1913年に建てられた現棟と寮食堂について京都大学が訴訟提起)が7月4日に始まるなど京都大学吉田寮をめぐる緊迫した状況となっているなか、学生寮の存在意義を事実に基づいて考察する事例研究として始められたものです。連載第1回は、1897年の京都帝国大学創立から1912年までの、現在の場所に吉田寮が建てられる前史が扱われ、以下の記事が2頁にわたって掲載されています。

「通史 創設から一時閉舎まで(1897年～1912年)」

「史料から見る吉田寮 西島所感」

「舎生日記ひろい読み」

「吉田寮123年の歴史」(年表)

富岡勝寄稿「論考 初代総長木下広次と寄宿舎」

わたしの論考は、これまで取り組んできた研究を踏まえながら、日露戦後の1905年に、学内の風紀悪化などを背景に寄宿舎の廃止が木下広次総長の選択肢にあがっていた可能性を指摘し、廃舎でも監督強化でもなく、「切磋琢磨」の場として寄宿舎を位置づける告示を出して寄宿舎を再開したことの意味について考察しています。よろしければぜひ読んで下さい。『京都大学新聞』は、京大校内だけでなく、Webサイト<<http://www.kyoto-up.org/>>を通じて定期購読(1年間3000円)も可能です(富岡)。



『京都大学新聞』第2627号(2019年7月16日付)より

会員消息

ちょうど通勤帰りの先日、新宿駅にて「中央線開業130周年」の記念ラッピングトレイン号(中央線＝オレンジ電車)をみかけました。私は、郷里である山口県下関市から、大学進学を機に東京へ上京し、上京後1年ほど風情あるJR高尾駅(京王線併設)近くの古めかしいアパートに住んでいました。そんな自身の青春時代への懐かしさを誘う・・・といえば、アニメ「ああっ女神さまっ」(原作:漫画作品、2005年地上波TV放映)が、また最近YAHOO!関連のサイトにて、第1話から毎日順次無料公開されていました。作品の主人公ら(猫美工業大学自動車部所属)が通う大学の背景面に、私が大学生時代に実際通っていた〇〇大学の多摩キャンパスがしばしば用いられていて、“おいおい!懐かしい・・・”とついつい声を上げてしまいました(第4話「ああっ女王さまと女神さまっ」)。

そして、懐かしい学生時代によくみていたアニメ作品といえば、やはりあだち充さんや高橋留美子さんが描く漫画を原作としたものでした。最新のあだち作品で高校野球を題材とした、アニメ「MIX」(2019年TV放映)ですが、主人公ら(明青学園野球部所属)のライバル校として登場する、勢南高等学校野球部の投手は、同じくあだち作品「タッチ」の主人公・上杉達也(明青学園野球部)のライバルであった西村勇(現在は、勢南高校野球部監督)の息子という因縁です。おまけに父親がかつて、ヒロイン・浅倉南に恋していた如く、息子もまた・・・。今や父親となった西村勇は、不思議と上杉達也らと競い合った自身の高校生時代を、息子らの姿と重ねて思い出します(第5話「ピッチャーだろ?」)。(谷本)

共同体論に関心があり、少しずつですが学んでいます。寮生活を考える際、とても面白い視点が得られます。(金澤)

先月開催された「ニューズレター・コロキウム」の記録記事を担当させていただきました。当日は何を話すこともなく、黙々と記録作業に徹していました(「傍観していた」という表現のほうが正しいのかもしれません)が、長時間にわたる熱のこもった議論はとても刺激的でした。ありがとうございました。実は会員消息欄に書くのは今回が初めてでしたので、今さらながら(本当に今さらですが・・・)自己紹介をさせていただければと思います。

今年度より参加させていただいております、加藤雄大と申します。戦後日本の新制大学における一般教育科目の歴史に関心があります。まだまったく成果らし

い成果を挙げられていないので、「一般教育の歴史について研究しています!」とは口が裂けても言えない状況ではあるのですが、これからもニューズレターの購読や「ニューズレター・コロキウム」への参加を通じて、研鑽を積んでいきたいと考えています。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。(加藤雄大)

今回、取材と調査のため、約20年ぶりに金沢を訪れました。第一印象としては、北陸新幹線開通の影響により、以前にも増して観光地としての整備がなされたように感じました。しかし賑やかな市街地から一歩中に入ると、武家屋敷や茶屋街の閑静な佇まい、夕方には虫の音が鳴り響きホテルも宙に舞う金沢城…まるで異空間に突入したかのような感覚に陥りました。観光地・商業地として発展しつつも、古き良き部分もしっかり残っている街・金沢…またそう遠くないうちに訪れたいと思います。(田中智子)

本号の報告記事と神辺会員からのコラムのとおり、ニューズレター・コロキウムでわたしの研究を取り上げていただき、一人では分からない富岡研究の意味や課題をたくさんお聞きすることができました。大変励まされました。いただいたご指摘は、わたしにとって宝物になりました。

金澤さんの告知記事にありますように、旧制高等学校記念館夏期教育セミナーは気合いの入った内容になっています。本紙をご覧いただいているみなさんに、8月17日・18日に松本でお目にかかりたいです。(富岡)